



これからの期待

放射線科助教授
吉川 宏起

本年5月より当研究所附属病院放射線科で勤務しています。生まれは横浜ですが、大学時代は親元を離れて本州の果て、山口県で自由奔放な生活をしてきました。大学での6回の夏休みのうち5回は宇部の山奥でボートを漕いでいました。そのためか体力には自信がありますが、頭を使うデスクワークは苦手なほうです。けれどもこの研究所に来て数多い会議を通じて苦手なデスクワークのほうも鍛えられつつあります。私は大学卒業後、すぐに東京大学医学部放射線科に入局し、本年4月までは川崎にある関東労災病院にいました。私の理想とする放射線科は臨床各科との協力のもとに種々のX線あるいは核医学検査や診断そして放射線治療をスムーズに的確に行っていくことを考えています。

私の専門分野は主としてX線診断学・画像医学で、なかでも最近では磁気共鳴映像法(MRI)の診断学です。本研究所においても1.5ステラのMRI装置が来年3月に稼働を開始する予定となっていて非常に楽しみにしています。最近の研究ではリビオドールを含む動注用造影剤や酸化鉄粒子からなるMRアンギオグラフィー(MRA)用の造影剤の研究があります。前者はわが国において頻度の高い肝細胞癌に対する動脈塞栓術後のMRIによる評価に期待される造影剤で、後者は非侵襲的な血管系の描出法であるMRAの画質を高め、診断精度を向上させることが期待される造影剤です。MRIあるいは磁気共鳴スペクトロスコピー(MRS)は生体からの解剖学・生理学・生化学・病理学的情報を非侵襲的に得る優れた解析法で、これを臨床ならびに研究にいかに関能的に稼働させようかと苦慮しています。是非とも当研究所の皆様方からのご意見、ご協力をお願いいたします。

Clinical Research Ward

人工臓器移植科診療科

人工臓器移植科診療科では主に腎移植、一般外科、血液透析患者の診療に従事しています。これまでの腎移植症例数は300例を越え、これは日本の移植施設の中でも10指に入る実績を誇るものであり、わが国における腎移植の普及に多大な役割を果たしてきました。さらに脳死肝移植が倫理委員会承認され、肝移植の実現に向けて積極的に取り組んできましたが、残念ながら肝移植は今だ実現していません。しかし、このような努力は、肝、胆、脾を中心とした一般外科症例の増加をもたらす、もはや『人工臓器移植科』という科名は現状に相応してないと思っています。一方、血液透析は慢性、急性腎不全に対してだけでなく、自己免疫疾患に対する抗体吸着療法、急性肝不全に対する血漿交換療法など先端的医療に不可欠な治療手段となりつつあり、東大3病院の中で唯一の透析施設として活躍しています。現在、臓器移植生理学研究部と合わせて11名の医師がこれらの診療に当たっています。死体腎移植では深夜に手術道具一式を持参して他病院に腎摘出手術のために出向くこともしばしばで、常に全員が24時間on call体制をとっています。また、研究面では移植免疫の基礎的研究はもとより、新しい免疫抑制剤の効果についての動物実験、脾細胞



移植の実験など、各人が臨床の合間をぬって精力的に行ない、特に大動物(イヌ)を使った腎移植、肝移植の実験は臨床のシミュレーションを兼ねて全員参加で行われています。こうした研究成果の一端は、最近ではこの夏行われたアジア移植学会(韓国)で7つの演題(口演6題、ポスター1題)として発表されています。医科研病院は常に先駆的医療を目指す病院として位置づけられています。当診療科では先端的で特殊な医療を遂行するためには、日常診療を着実にこなす不断の努力が不可欠だとの考えのもとに日夜診療、研究に励んでいます。